



特集

人事評価制度の運用

やまなし

自治の風

Yamanashi JICHI no KAZE
Vol.38 September.2015

contents

-
- 巻頭随想
- 市町村リレー まちづくり夢づくり
- 苦言提言
- 地域シンクタンク
- 市町村の元気印



machijim **an**

お問い合わせ先

ゆずの里クロスカントリー&絶景ウォーク大会
 実行委員会事務局
 富士川町
 商工観光課 TEL:0556-22-7202
 生涯学習課 TEL:0556-22-5361



シリーズ **ま・ち・自・慢** *Fujikawa-Town*
富士川町

ゆずの里クロスカントリー&絶景ウォーク大会

富士川町では、昨年ご好評をいただいた「ゆずの里クロスカントリー&絶景ウォーク大会」を11月29日に開催します。コースには富士山の眺望に優れた絶景ポイントや町の観光スポットを多く盛り込み、見どころ満載です。

この大会は順位を競うことよりも、参加者と地元住民とのふれあいを大切に行っています。あじさい寺で知られる「小室山妙法寺」では、特産のゆずを使用したゆず餅やゆずうどん、正面に富士山を望む平林「みさき耕舎」では、棚田でつくられたおむすびや大根の煮物、手作りコンニャク、また、ゴールである「道の駅富士川」では、町の郷土料理「みみ」を提供し、地元住民と一緒におもてなしをいたします。

町のおすすめスポットをゆっくり歩くことで、富士川町にまた来たいと思っただけのような大会になるよう準備をすすめています。

ぜひ、富士川町の魅力を感じてください。ご参加をお待ちしています。

やまなし

自治の風

Yamanashi JICHI no KAZE
Vol.38 September.2015

Contents

Yamanashi JICHI no KAZE Vol.38 September.2015

- まち自慢 富士川町
- 02 巻頭随想 「緑と活力あふれる生活快適都市」の実現を目指して
甲斐市長 保坂 武
- 04 市町村リレー 笛吹市
- 08 苦言提言 地域の魅力、価値、底力の再評価 ～選択と集中の前に～
特定非営利法人日本上流文化圏研究所事務局長 鞍打 大輔
- 09 特集「人事評価制度の運用」
- 10 特集1 人事評価制度の導入と県内市町村の準備状況について
- 12 特集2 松川町の人事評価制度 -導入から改善運用10年の取り組み-
- 17 特集3 甲斐市の人事評価制度の運用
- 20 講演録
- 24 ICTの推進
- 26 地域シンクタンク
- 28 市町村の元気印
- 30 自治 Q & A
- 33 市町村調査研究事業
- 36 がんばっていま～す。
- 38 はつらつ!!市町村職員
- 40 市町村振興協会たより
時の人
編集後記



表紙写真 大柳川溪谷の観音滝(富士川町十谷地区)

大柳川溪谷には、大小10本のつり橋と8つの滝があり、四季折々に美しい景色が楽しめます。特に紅葉と新緑の時期は、多くのカメラマンが訪れる人気のスポットとなっています。

溪谷内の遊歩道は整備されており、トレッキングとしても人気の場所です。

【富士川町提供】

「緑と活力あふれる 生活快適都市」の 実現を目指して

保坂 武 甲斐市長



保坂 武 (甲斐市長)

PROFILE

昭和20年	2月1日	甲斐市篠原生まれ
昭和52年	4月	竜王町議会議員(3期)
平成3年	4月	山梨県議会議員(3期)
平成15年	4月	衆議院議員(3期)
平成19年	8月	文部科学大臣政務官
平成20年	10月	甲斐市長就任(現在2期目) 70歳

平成16年9月に竜王町、敷島町、双葉町の3町が合併し、昨年10周年を迎えた甲斐市は甲府盆地の中西部に位置し、面積は71・94km²、人口は県内2番目の約7万5千人の街です。

市の西部を流れる釜無川には武田信玄が築いたといわれる歴史的治水施設「信玄堤」があり、また、ドラゴンパーク展望塔からは甲府盆地を眼下に北に八ヶ岳、西に南アルプス、そして南に富士山の風景を眺めることができます。

■ ラジオ体操のまち

本市では市民の皆様が健康な体を維持できるように、「ラジオ体操のまち甲斐市」をキャッチフレーズに普及に取り組んでいます。このような背景の中でラジオ体操の推進に、甲州弁を活用し、更なる普及を図ろうと昨年、甲州弁ラジオ体操第1のCDを制作しました。

CDの反響は大きく、市内外はもとより、日本

全国から問い合わせがあり、希望者については、1,000円以上の「ふるさと応援寄附金」の特典として贈呈する方法で取り組んでいます。

■ 創甲斐教育

甲斐市の甲斐の字の上に、ものを考え造り出す「創造」の「創」の字を付け、「創甲斐教育」と命名し、子どもたちが立派な大人になるよう、教育の推進に力を注いでいます。

「創甲斐教育」は、学校のみならず、子どもを育む環境である家庭・学校・地域社会が手をつなぎ、連携を深め、一体となって取り組むことで、はじめて成果を得ることができると考えています。

平成21年度に策定した「甲斐市創甲斐教育推進大綱」の取り組みも昨年度5年目の中間年となったことから、創甲斐教育推進大綱策定会議において、教育関係者などのご意見やご提言をいただきながら見直しを行ったところです。



ドラゴンパークからの甲府盆地と富士山

時代に沿った適正な目標を掲げ、学校だけに留まらず、引き続き地域や関係機関と連携して「創甲斐教育」に取り組みます。

■環境への取り組み

再生可能エネルギーへの取り組みの一環として、太陽光パネル及び太陽熱温水器の設置に対しての支援を行っています。

昨年4月から取り組んでいる、生ごみ減量化への研究施設として設置した甲斐市バイオマスセンターにおいては、学校の給食残渣を回収し、土壌改良や植物の発育促進などに有効といわれている液肥の精製を実施しています。

さらに環境課に「バイオマス推進係」を新設し、木質などの地域資源を有効活用したバイオマス事業の調査研究を進め、環境にやさしく災害に強いまちづくりを目指した「甲斐市バイオマス産業都市構想」の実現に向け取り組みます。

■地域ブランドの確立

農業振興につきましては、農業生産の基盤となる農地を保全し、農地の有効活用を図るとともに、耕作放棄地を解消し、特徴ある農業生産を進めていくことが重要です。

耕作放棄地解消に向けて、また、地域活性化と特産品のブランド化を目指して赤坂台地区において取り組んでいる、トマト、サツマイモ作りも順調に進んでいるところです。

そのさつまいもを使った焼酎「大貳」の販売もこの春で3年目となり、今年も好評を頂いているところであります。先日この焼酎「大貳」が2015年春季全国酒類コンクールの本格焼酎・



チャレンジデーでのラジオ体操



甲州弁ラジオ体操CD

芋焼酎部門において昨年に引き続き、2年連続で3位入賞を果たしました。

また、新たに一升瓶の商品も販売しており、こちらも多くの皆様にご賞味いただけたらと思うところです。

「赤坂とまと」の出荷につきましては5年目を迎え、甲斐市ブランドとして今後もなお一層のPRを図って参りたいと考えています。

■地方創生

地方創生関連の先行型事業につきましては、甲斐市人口ビジョン・甲斐市総合戦略の策定を進め

るとともに各種先行事業に取り組んでいるところです。

特に、移住定住・二地域居住促進事業につきましては、本年6月6日に東京都杉並区を拠点として、魅力情報発信事業運営業務をスタートさせ、現在、首都圏のマルシェや朝市に出店するなどして特産品のPRを行うとともに、山梨暮らし支援センターと連携して甲斐市への定住化の促進に取り組んでいます。

■新しい10年に向けて

昨年10周年記念式典において市の木を「ケヤキ」、市の花を、「サクラ」、マスコットキャラクターとして、甲斐犬と甲斐市名産のやはいぬを組み合わせた「やはいぬ」を選定し、正式に発表しました。

今年はこの「やはいぬ」を全国にPRするため、「ゆるキャラグランプリ2015」にエントリーしていますので、応援と投票をよろしく願います。



マスコットキャラクターの「やはいぬ」

これまでの10年間は旧3町の一体化に努めるとともに、各地域の歴史、文化、伝統を尊重し、特徴を生かしたまちづくりを行ってまいりました。市では今後も緑豊かな自然環境と調和を図りながら、甲府盆地の新たな発展をリードする「緑と活力あふれる生活快適都市」の実現を目指して、住みよい郷土づくり、誇れる郷土づくりを進めていきます。

市町村リレー

まちづくり 夢づくり

笛吹市 38

MACHIZUKURI
YUMEZUKURI

「日本一桃源郷」

歴史・文化資源に囲まれた、

桃とぶどうと温泉のまち



新道峠からの富士山

笛吹市は、甲府盆地の東寄りに位置し、JR中央本線、中央自動車道の利用により、東京と90分で結んでいます。人口は7万1千人余り。市の名前の由来となった笛吹川に沿った平坦地から南側に緩やかな丘陵地が広がり、御坂山地へとつながっています。平坦部には市街

地が形成され、山麓部の集落を取り囲むように全国に誇る果樹地帯が広がり、山間部では、古民家や石垣の原風景を見ることができま。また、古代から甲斐国の中心地として栄えたことから、市内には、多くの遺跡、史跡が残っています。

日本一桃源郷の保全に向けて

笛吹市の地域は、肥沃で排水のよい土壌、長い日照時間と昼夜の気温差が大きいことで、果樹栽培に適しており、特に、桃、ぶどうの作付面積は、日本一といわれています。市では、全国に誇れる

果実郷を守り、さらなる発展を目指して「桃・ぶどう日本一の郷」宣言(平成17年10月)、「日本一桃源郷」宣言(平成25年4月)を行いました。

春、桃の花が咲き誇る桃源郷の眺めは圧巻で、この景色を求めて全国から多くの人が訪れます。そして、この桃源郷の風景を世界農業遺産として残して行うとする取り組みが、峡東3市の連携により始まっています。

しかしながら、日本一を誇る果樹地帯であっても、農家の高齢化等による担い



桃の受粉作業

手の不足と耕地面積の減少が続いています。このため、農業従事者の確保に向けて、就農を目指す農家の子弟等を支援する制度や、U・Iターンにより就農しようとする新規就農者向けの支援事業を実施し、これまでに50名以上の若い農業者を支援してきました。また、市内には、

現在25の農業生産法人が設立されています。経営の法人化は、農業経営の規模拡大につながり、新規就農の受け皿や遊休農地の引き受け手となることのほか、農業経営の円滑な継承により営農活動が維持できるメリットがあることから、引き続きその設立を推進していきます。さらに、定年帰農者への技術研修や受入れにも取り組みを進め、県下最大の果樹産地として、日本一の桃源郷であるために、担い手の確保や農地の保全のための様々な事業を展開しています。

国際観光都市を目指して

農業とともに、もうひとつの基幹産業が観光です。石和温泉郷・春日居温泉郷は、山梨県の観光宿泊拠点として、四季を通じて多くの観光客を迎え入れ、人々の癒しの場としてにぎわっています。最近では、富士山の世界遺産登録、2020年の東京オリンピック開催決定や円安などにより、海外からの観光客が大きく増加しており、富士山北麓を訪れながら、比較的近距离に位置する当地を宿泊地とする傾向がみられるようになっていきます。今後も関係者一体となって、外国からの旅行者の受け入れに力を入れ、多くの旅行者に愛される国際観光都市を目指した取り組みを進めてまいります。

また、笛吹川の水辺空間を生かし、水辺とまちが一体となった美しい景観や新しい賑わいの創造に向けた「ミズベリング構想」によるまちづくりや、リアル実験線の走行風景を目の前で見ることができる「リニアの見える丘」の整備など、地域の資源を活用した魅力ある観光地づくりへの取り組みも始めていきます。

交通の要衝として

笛吹市は古くから交通の要衝の地として栄えてきました。現在でも、J R

中央本線、中央自動車道、国道20号や137号などの主要な国・県道が通過しており、交通の利便性が高い地域です。

鉄道の玄関口は、JR中央本線「石和温泉駅」であり、現在、駅舎の建て替え、駅周辺の整備事業が進んでいます。駅の南側では、土地区画整理事業による街並みが整備され、駅前広場では、足湯が旅行者の疲れを癒し、市民により管理されている彩りあざやかなバラの植栽が、目を楽しませてくれます。平成27年3月には、新しく生まれ変わる駅舎の一部供用が開始されました。今後、駅の北口広場とアクセス道路の整備などが完了し、平成28年初旬には、全面供用が開始される予定となっております。駅利用者の利便性の向上が図られます。



石和温泉駅舎完成イメージ図

高速道路の玄関口は、現在、中央自動車道の一宮・御坂インターチェンジの1ヶ所しかない状況ですが、近く「笛吹八代スマートインターチェンジ」が開設されることとなりました。このスマートインターチェンジは、市南部と富士山周辺地域とを結ぶ新たな玄関口となり、さらなる交流人口の増加が期待されています。

また、新たな高速道路の出入口ができることにより、災害時の緊急物資の搬入出、緊急車両の通行、避難ルートの複雑化が図られ、防災・減災力の向上が見込まれます。さらには、首都圏とのアクセスが容易となることにより、新たな企業誘致など、さまざまな分野においてヒト・モノの交流が活発になり、地域活力



笛吹八代スマートインターチェンジ完成イメージ図

の向上につながるものと期待されます。

地域の文化を育み伝える取り組み

笛吹市の区域は、4世紀の古墳時代から武田信虎が拠点を甲府躰躰ヶ崎に移すまでの約千年にわたり、甲斐国の中心地でありました。市の南東部に連なる山々から御坂山地に続く丘陵地、金川などの大小河川が作り出した複合扇状地上には古くから人々の生活が営まれていました。市内には、釈迦堂遺跡や桂野遺跡などの縄文遺跡や岡銚子塚古墳をはじめとする古墳群、甲斐国最古の寺本廃寺跡、甲斐国分寺跡及び国分尼寺跡など、多くの遺跡や史跡、慈眼寺や一宮浅間神社をはじめとした重要文化財建造物が残されています。

市では、古代・中世を通じて果たしてきた歴史上の重要な役割を認識し、郷土愛を育む礎として、「甲斐国千年の都」を宣言（平成21年10月）し、豊富な歴史・文化資源を保護し、将来に伝えるべく努力を続けています。

「文化財めぐり」や「古道めぐり」、芦川集落の兜造民家に代表される伝統的建造物群、石垣などの景観をめぐる「芦川散策」を実施するなど、学校教育をはじめ地区や団体と連携し、市民が地域の文化や歴史に関心を持ち、学び、郷土愛を育む機会を提供しています。さらには、甲斐国分寺跡や岡銚子塚古墳といった



川中島合戦戦国絵巻

特定の史跡や博物館、美術館を拠点施設として位置付け、史跡の整備を行ないながら、市全域のフィールドミュージアム化と、それらを有機的に結び付ける歴史・文化資源のネットワーク化に取り組んでいきたいと考えています。

古くから伝わる伝統的祭りや行事も数多く受け継がれています。4月に行なわれる浅間神社の「おみゆきさん」や山梨岡神社の「太々神楽」、7月の「石和鶉飼」、8月の盆の送り行事の大文字焼きや笈形焼きなどがあり、季節の風物詩として、多くの市民に親しまれています。



古道めぐり

本市の境川町は、俳句のまちとして知られています。現代俳句の巨匠、飯田蛇笏・龍太父子が生れ育ち、終生この地において創作活動を続けました。父子の居宅「山蘆」は、今日でも俳句愛好者の聖地であり、毎年開催される「笛吹市小学生・中学生俳句会」には、全国から3万通を超える応募があります。

子育てにやさしい環境づくり

全国的に少子化が進み、人口の減少が予測される状況にあつて、本市においても、日々子育てに奮闘する世帯への支援を図ることは、人口減少への重要な対策のひとつとなっています。

多様な子育て支援サービスの提供や地域における支援体制の整備、医療機関等の確保など、だれもが子どもを安心して産み、楽しく子育てができる環境が求められます。

また、共働き家庭の増加や子育てをめぐる家庭や地域の課題、問題が顕在化してきているとも感じています。

仕事と子育ての両立を支援し、誰もが安心して子育てができる環境や子どもを産める環境の整備を図らなければなりません。一方で子どもや保護者の人権を守る視点を忘れてはなりません。

本市では、他市に誇れる「充実した乳幼児健康診査」「その後の相談事業の充実」に取り組み、疾病等の早期発見や育

児不安の解消を行っています。また、マタニティスクール、思春期教室の開催、妊婦健康診査の受診率の向上など、母と子の健康づくりの取組みを行っており、関係機関との連携調整も良好で、効果的な支援ができています。さらに保育所の充実や子育てに関する情報提供、相談の場、仲間づくりを推進する場として子育て支援センターの充実などを図っています。

これらの関連施策を、県が市内に設置します産後ケアセンターと有機的に結びつけ、子どもの健やかな育ちと、保護者の子育てを地域社会全体で支援する環境整備への取り組みを進めていきたいと考えています。

結びに

豊かな自然と果実や温泉など様々な資源を有する私たちの郷土も、近い将来、人口の減少と高齢化により、極めて厳しい地方自治の運営を余儀なくされる状況へと突入してまいります。先人たちが築きあげてきた、まさに風光明媚な桃源郷の里を、人々のつながりを、豊かな生活を、後世まで守り発展させるため、いまこそ、オール笛吹の名のもと、あらゆる面で、地方創生の多くの戦略を切れ間なく押し進め、近代社会の象徴的田園都市を構築してまいります。

地域の魅力、価値、底力の再評価 ～選択と集中の前に～

元々、早川町はもとより山梨県とも全く縁のなかった私が、早川町に移り住んで17年が経ちました。早川町は過疎高齢化の著しい町で、「日本でも最も人口が少ない町」として知られています。確かに移住したばかりの頃と比べると、人口は半分ほどになり、私の家の周りも空き家や耕作放棄地が目立つようになりました。しかし、一方で、若い世代が町に戻ってきたり、都会からの子育て世代の移住者も増えてきたりと、厳しい中にも明るい兆しが確実に見え始めていると感じています。

そうした状況に一役買っているのが、町の教育委員会が進める「山村留学」です。教育委員会では、地域の中学校を存続させるために、平成15年度から山村留学に取り組んできましたが、当初は学校や保護者からなかなか理解を得られず、思い切った進められない状況にありました。それが、平成25年度に早川北小学校の全校児童が4人なることが分かり、統廃合の危機を感じた当時の学校の先生が立ち上がり、地域や保護者も巻き込みながら山村留学に取り組み始めた経緯があります。その結果、翌年には早川北小学校の児童数が18名に増加すると

苦言 提言

Kugen Teigen

鞍打 大輔

daisuke kurauchi

特定非営利法人日本上流文化圏研究所
事務局長



いう大きな成果をあげました。

それ以降も、教育委員会、小中学校、早川北小学校の保護者が中心となつて組織する「北つ子応援団」、そして私が所属するNPO法人日本上流文化圏研究所の4者が連携し、町ぐるみで山村留學生の受け入れを推進しています。7月11日にも、東京有楽町にあるふるさと回帰支援センターにて、「親子で田舎暮らしセミナー」を開催してきました。セミナーには、4者の他に、役場職員、早川南小学校の保護者、そして小中学生も含め、総勢21名が参加し、早川町のPRをしてきました。また、7月25日、26日には、北つ子応援団主催の「親子で早川暮らしツアー」が開かれ、こちらも早川での子育てに興味のあるご家族6組20名が参加し、大いに盛り上がりました。

このように、早川町では今、連携型のまちづくりが少しずつ進んでいます。それぞれが立場を超えて当事者となり、お互いに信頼関係を結ぶことで、何か問題が起きたときにも人のせいにならず、それぞれが自分のこととしてまわりと話し合いながらひとつずつ改善し、それができつつあると感じています。山村留学で児童数、生徒数が増えたことももちろんですが、こうした地

域内の関係性が生まれたこと、そして住民が地域の価値に気づきはじめたことがいちばんの成果で、それが地域の力になつていくと確信しています。

一方、全国的な流れで見ると、学校の統廃合を進める自治体が少なくありません。行政の効率化、無駄の排除という考え方は分からなくもないですが、学校がなくなつた地域に若い人たちが積極的に戻ってくることはないでしょう。すなわち、この地域に今後若い人たちは住まなくていい、この地域はこのまま衰退させていく、と行政が宣言しているようなものだと思います。

行政の効率化、無駄の排除は当然必要ですが、それはまず行政内部、行政職員一人ひとりの日常業務の効率化、生産性の拡大に向けられるべきで、効率化という大義名分の下、地域を切り捨てるようなことをしてはいけません。選択と集中をすれば、はじめられた地域は疲弊します。やむなくそうする場合でも、行政としては当然、はじかれた地域に対して将来的なビジョンを示すべきだと思います。

周縁部も含む地域全体がどうあるべきか、住民一人ひとりがどうしたら幸せになれるのか。目先の利益に目を奪われず、長期的な視点に立ち本質的な地域のあり方を見定め行動するのが、民間企業ではない行政の役目だと思うのですが、いかがでしょうか。